置き換えられた攻撃行動に伴う自尊心の変化

谷田　あかり

攻撃行動は、挑発された対象に対して行われるものと、挑発された対象とは別の対象に対して行われるものがあり、後者は置き換えられた攻撃(displaced aggression)と定義される(Dollard et al., 1939 宇津木訳 1959)。また、些細な誘発事象をきっかけに生起する置き換えられた攻撃を TDA(triggered displaced aggression)という (Dollard, 1938)。この TDA について、Pedersen, Gonzales, & Miller (2000)は、誘発事象が置き換えられた攻撃の生起に及ぼす影響を検討する TDA パラダイムを構築した。

この TDA パラダイムにおいて、挑発事象後の実験参加者は自我脅威状況、つまり自尊心を傷つけられた状態にある。その状況で誘発事象が起きると置き換えられた攻撃が生起しやすい。それは、攻撃行動が自我脅威状況から脱却するための手段として行われている、と考えられるからである。これまで TDA に伴う自尊心の変化についての研究は行われていない。そこで本研究では、淡野(2008)が作成した仮想場面法を用いた質問紙を使用し、TDA 前後で状態自尊心を測定することにより、攻撃行動に伴う自尊心の変化について検討する。また、TDA に伴って自尊心が回復すると仮定すると、TDA 量と自尊心の回復量は比例すると考えられる。そこで、攻撃対象者の地位によって TDA 量が変化するという研究(淡野, 2008)から、攻撃対象者の地位を先輩と後輩にすることで自尊心の変化量に差が現れるかについて検討する。

仮説としては、置き換えられた攻撃を行うことで、挑発事象後よりも状態自尊心が回復しているならば、(1)置き換えられた攻撃を行った後の状態自尊心は、挑発事象の直後の状態自尊心よりも高くなる、と考えられる。また、TDA 量が多いときは状態自尊心の回復量も大きくなると考えられること、攻撃対象者の地位が実験参加者や挑発者より低い場合に TDA を表出しやすい(淡野, 2008)ことから、(2)攻撃対象者の地位が低い後輩条件の方が、先輩条件よりも状態自尊心の変化量が大きい、と考えられる。

質問紙は、大阪大学に通う学部生と院生に配布した。分析対象者は 108 名、平均年齢 19.77 歳(SD = 2.10)であった。質問紙は、淡野 (2008)の研究で用いられている TDA パラダイムを参考とした場面想定法質問紙を使用し、状態自尊心を挑発事象並びに攻撃評定の後に測定した。また、攻撃評定に関する自己評価や、課題終了後に向社会的行動を行う機会を設けるなど、元の質問紙にいくつかの要素を加えた質問紙を作成した。具体的には、挑発事象、挑発事象後の状態自尊心測定、誘発事象、誘発事象後の攻撃評定、攻撃評定後の状態自尊心測定、向社会的行動機会、攻撃評定の自己評価、物語文に関する設問、パーソナリティの測定という順序で質問紙を構成した。

分析の結果、先輩、後輩条件の双方で攻撃後自尊心は攻撃前自尊心よりも有意に高かった。このことから、攻撃前後で状態自尊心が回復していることが明らかとなり、仮説(1)を支持した。また、攻撃後について、先輩条件の方が後輩条件より状態自尊心が有意に高かったが、これは仮説(2)を支持しなかった。

仮説(1)については、挑発事象によって低下した状態自尊心を、攻撃行動によって回復したと考えられる。仮説(2)については、攻撃量が状態自尊心の変化に影響を及ぼさなかったことに加えて、先輩条件と後輩条件共に挑発者が先輩であったことから、先輩条件では挑発者と攻撃対象者の類似性が高くなったことが要因であると考えられる。類似した対象に攻撃を与えたことで、関連性の無い人物を攻撃した際よりも状態自尊心の回復につながりやすかったのではないかと考えられる。

本研究から、置き換えられた攻撃によって、攻撃量の大小に関わらず状態自尊心が回復する、ということが明らかとなった。この置き換えられた攻撃に関する新たな知見は現実の社会問題にも適用できるものであり、攻撃行動の原因や解決策を究明する助けとなるだろう。(社会心理学)